

キリスト教と近代化の諸相 現代キリスト教思想研究会

2008年3月 81～88頁

パネンベルクとポスト基礎づけ主義

濱崎 雅孝

序

本稿では、パネンベルクの神学の基本的な方法論を明確にすることを目標とする。これはパネンベルクを研究対象とするにあたって出発点となるべきものであるが、その出発点そのものが研究者によって異なっているという現状がある。彼の用いた方法論は様々な誤解を受けてきたため（その誤解の多くは彼自身の言葉に由来するのだが）、彼に対して批判的な立場を採る者も擁護する立場を採る者もともにその誤解から完全に自由になっていないように見受けられる。そのような事情を鑑み、ここではアメリカの神学者F・ルロン・シュルツの著書『神学のポスト基礎づけ主義的課題——ヴォルフハルト・パネンベルクと新しい神学的合理性』¹の論述に則ってパネンベルク神学の方法論を明確にし、その現代的意義について考察してみようと思う。

パネンベルク研究、特に英語圏における研究の多くは、パネンベルクを「基礎づけ主義者」と見做し、その近代的な理性主義を時代遅れのものとする傾向にある。そのような批判は根拠のないものではないが、しかしそこには明らかな誤解と思われる点も少なくない。シュルツはその誤解の由来を糺し、パネンベルクの神学が決して近代の遺物として捨て去られるべきものではないことを彼の言葉を拾いつつ緻密に論証している。

パネンベルクの神学を特徴づける鍵概念として、「理性」、「歴史」、「先取り」の三つを挙げるのが一般的である。しかしシュルツによれば、この三つをパネンベルク神学の鍵概念と見做すことは、彼の初期の著作に表れた思想だけに妥当するものであり²、『組織神学』以後の思想の変化には対応できていない。パネンベルクは『組織神学』を執筆するにあたって、それまでに寄せられた批判を考慮したはずであるし、初期の著作における欠陥を補うという目論見も

¹ F.LeRon Shults: *The Postfoundationalist Task of Theology, Wolfhart Pannenberg and the New Theological Rationality*, Eerdmans, 1999.（以下、PTTと略記）なお、本書の序言はパネンベルク自身が書いており、そこで彼はシュルツの提唱する「ポスト基礎づけ主義」の立場に同調すると明言している（PTT）。

² パネンベルク神学の鍵概念を「理性」と考える研究者は、『科学理論と神学』（1973）に依拠しており、「歴史」と考える研究者は、『歴史としての啓示』（1961）に依拠しており、「先取り」と考える研究者は、『キリスト論要綱』（1964）に依拠している。いずれも『組織神学』（1988～1993）よりかなり前に書かれたものである。

当然あったであろう。したがって彼の初期の著作だけから、その思想全体を批判することは許されない。それにも拘らず未だにこの三つの鍵概念に固執する論者がいるという事実は、パネンベルクの初期の著作が神学界に与えた影響がいかに大きかったかを物語っているが、それ以上の意味はもはやないはずである。

では、パネンベルクの『組織神学』³の内容も考慮した上で、その思想全体を特徴づける鍵概念はあるのだろうか。あるとすれば、それは何であろうか。シュルツは「あらゆるものを神との関係の下で理解し説明すること」こそが、パネンベルク神学全体を貫く方法論であると言う⁴。それは人間学を基礎として「下から」神に接近するということではなく、最初からすべての人間的現象を神との関係において考えるということである。しかし、そのような思考法はパネンベルク自身が批判した「上からの神学」（K・バルトなど）に戻ることになるのではないだろうか、という疑問が湧いてくる。シュルツはこのような疑問に対して、「上から」でも「下から」でもない第三の道を提唱することによって答えている。その第三の道とは、下からの基礎づけ主義でも、上からのドグマティズムでもない、「ポスト基礎づけ主義」である。シュルツはパネンベルクの方法論の中に「ポスト基礎づけ主義」と呼ぶべきものが多くあることを指摘し、その思想の現代的意義を強調している。そこで、彼が提唱する「ポスト基礎づけ主義」の内容とその意義について考察する必要があるが、そのためにまず彼がパネンベルク神学の特徴として挙げた「あらゆるものを神との関係の下で理解し説明する」ということについて、簡単に見ておきたい。

1 神との関係の下で（sub ratione Dei）

パネンベルクは、1973年の著書において次のように述べている。

「神が神学固有の対象であるということは、神学という概念の歴史から見て取ることができる。すでに述べたように、「神学」という名称は、初めは神についての教説という狭い意味しか持っていなかった。だからそれは、神の救済計画とそれが創造に始まり終末において完成する救済史において遂行されることについての教説としての経綸とは異なる意味を持っていた。後に神学の概念はこの神の経綸の主題へと拡張されたのであるが、この拡張が正当化されるのは、そのように包括的に理解された神学が主題としているもののす

³ もっとも、この『組織神学』自体が1993年に完結しているから、すでに古いということもできる。パネンベルクはその後、『組織神学論集』（“Beiträge zur Systematischen Theologie”, Vandenhoeck&Ruprecht, Bds.1-3, 1999-2001）を刊行しているが、そこには『組織神学』以後の論文もいくつか含まれているので、彼の神学体系全体について評価するためには、これらの論文も参照しなければならないだろう。しかし、これはあくまでも論文集であり、まとまった神学書として発表されたのは、やはり『組織神学』が最後である。

⁴ PTT20.

べてが、神への関係という観点の下で(sub ratione Dei)主題化されたことによってである。神学的探究が取り組む対象の概念を、その対象が置かれている関係から切り離さず、むしろこの関係をその対象自体の現実性の表現として捉えるなら、神学的探究の様々な対象を神への関係の下で問うことは、その対象の対象性とは異なる主観的な考察法としてだけでなく、対象と神学的対象の特殊性にも合致していると思われる。いずれにせよ、神への関係の下での考察を通してのみ、神学における様々な事柄の取り扱いは、別の観点の下で同じ対象領域を主題化する他の学問の取り扱いから区別されるのである。」⁵

シュルツは、パネンベルクがこのような関係性の概念を自らの方法論の基本的原理として用いているので、それが彼の神学全体を理解する鍵概念にもなると指摘する。周知のように、この「神との関係の下で(sub ratione Dei)」という言葉は、トマス・アクィナスが用いたものである。パネンベルクはしかし、これをトマスとは異なる意味を込めて使っている。トマスはアリストテレスの影響下で、関係というのは偶然的なものであり、実体にとっての本質的な要素ではないと考えている。したがって、神との関係も実在する関係ではなく概念的な関係にすぎないと考えている。それに対してパネンベルクはヘーゲルの影響下で、真の無限は有限との対立関係によって定義されるのではなく、無限の自己否定によって真の無限が生じると考える。このことは、神の聖性を考えるときによく理解される。パネンベルクによれば、聖性は俗性と対立しつつ、しかも俗性の中に入ってくるときに真の聖性となる。これが受肉の概念につながることは容易に見て取れる。パネンベルク神学の方法論は、聖なる神との関係において俗なる世界について考えるものである。パネンベルクはよく「全体性」という言葉を使い、それが批判的になることもあるが、この全体性というのもヘーゲル的な真無限という意味で考えなければならないのである。すなわち部分(個)を否定する全体ではなく、部分との関係において生成する全体というものを、パネンベルクは念頭に置いているのである。

2 ポスト基礎づけ主義

次にシュルツが提唱するポスト基礎づけ主義について概観してみよう。ポスト基礎づけ主義の「理想型」は、次の四つの対句によって特徴づけられる。対句の前者が近代的基礎づけ主義の考え方を示しており、後者がそれに対する批判から生まれた非基礎づけ主義の考え方を示している。ポスト基礎づけ主義は、この両者の間に第三の道を探る⁶。

経験と信念：

⁵ Pannenberg: *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp, 1973, 300.

⁶ PTT43.

「解釈された経験があらゆる信念を生み出し、育て上げる」

「信念のネットワークが経験の解釈を形成する」

真理と知識：

「真理の客観的な統一体が、知識の理解可能な探究にとっての必要条件である」

「知識の主観的な多様体が真理要求の誤謬可能性を示す」

個人と共同体：

「合理的な判断は、社会の中に位置づけられる個人の活動である」

「文化的共同体は合理性の基準を決定的でない仕方を取り次ぐ」

説明と理解：

「説明は普遍的で文脈を越えた理解を目指す」

「理解はある特定の文脈における説明から導き出される」

以下、シュルツの論述に従って、これら四つの対句を順番に詳しく見ながら、パネンベルクの方法論がポスト基礎づけ主義的であると言われる点を指摘していくことにする⁷。

まず「経験と信念」であるが、基礎づけ主義者は、ある基本的な信念（複数あってもよい）というものが存在し、他の信念はそれによって基礎づけられると考える。基本的な信念は他の何かに基礎づけられる必要はなく、それだけで自明なものとされる公理のようなものである。しかしパネンベルクは、「神学的言明は自明ではなく、自明な命題から論理的必然性によって導き出されるものでもない⁸」と言う。むしろ、信念は他の信念との一貫性（coherence）によって正当化され则认为している（ここだけ見ると非基礎づけ主義である）。つまり彼は、神の啓示を否定できない公理として、そこからすべてを演繹的に導き出すという手法は採らないのである。しかし彼は非基礎づけ主義とも異なり、ある信念が他の信念との一貫性だけで正当化され则认为していない。一貫性は必要条件であるが、十分条件ではないのである。一貫性以外に、信念体系の外側にある基準、例えば経験との適合性などが条件として求められる。したがって信念が経験によって覆されるということも起こり得る。信念はいつもそのような可能性に対して開かれているのである。

次に（真理と知識）であるが、基礎づけ主義の最大の特徴は確実性の探究であったのに対して、ポスト基礎づけ主義は、確実性に至ることができないことを認めつつもなお真理を探究し続けるという姿勢を採る。確実性よりも知解可能性に重点を置き、あらゆる真理要求の誤謬可能性を認めるのである。これはパネンベルクの方法論とほぼ重なっている。なぜなら、彼は至るところで「我々が到達できるのは暫定的な知識だけであり、それは絶えず変更を迫られる

⁷ PTT43-77.参照。

⁸ ST 1, 56 .

からである」と述べているからである。

「したがって、伝統的な宗教的言明を神学的に検証したり新しく作り直すことで理論的な確実性に至ることはできない。せいぜい確実性を実証するか実証しないかの判断を成り立たせるとか、与えられた宗教的主張がどの程度まで実証され、あるいは実証されないかを判断するための根拠を申し立てるくらいである。」⁹

ここで実証というのは、神の観念が現実の人間の経験をどの程度まで理解可能なものにするのかを検証するという意味である。真理要求はこの実証によって絶えず更新されるのである。

次に（個人と共同体）であるが、ここでは解釈学の知見が取り入れられている。シュルツはまず、個々人における理性の働きと共同体の実践との関係について問う。彼によると、この関係は直線的な構造を持っていない。すなわち、一方を基礎として他方をそこに基礎づけるという関係は成り立たない。むしろ、両者は弁証法的に発展するという関係にある。そのように考えることで、理性を絶対視する基礎づけ主義を斥け、主体を共同体に吸収してしまう相対主義にも陥らずにすむことになる。このような考え方はまさにポスト基礎づけ主義的であるということになるが、パネンベルクの発想もこの線に沿っていると言ってよい。

最後に（説明と理解）であるが、ここでも続いて解釈学の知見が取り入れられている。パネンベルクは神学に学際的な立場を要求しているが、それはポスト基礎づけ主義の狙いとも一致している。シュルツはクレイトンの「学問しての神学」の定義を踏襲する。それは以下の四点にまとめられる¹⁰。

- （a） 学問の一分野として、神学は間主観的に批判可能な説明を定式化する。
- （b） 他の学問の成果も、神学の仕事の一部分として考慮しなければならない。したがって、自然科学、社会科学、歴史学、哲学などからの批判に答えていく必要がある。
- （c） 神学における基本的な信念が問いただされる場合には、正当な根拠をもって応えなければならない。
- （d） 神学の主張は学問の文脈においては仮説として受け取られなければならない。

このクレイトンの定義はパネンベルクの神学にそのまま当てはまるものである。パネンベルクの考えでは、神学は他の学問と同様に全体と部分のカテゴリーによって現実を解釈しているが、その「全体」の捉え方が他の学問とは異なっているのである。この点が、神学は説明と理解を両方含んでいる、というパネンベルク独自の解釈学を理解する鍵となる。彼にとっての「全

⁹ WT347 .

¹⁰ Philip Clayton: *Explanation from Physics to Theology*, New Haven, 1989, 62.

体」はすでに見たように「真無限」としての神である。ここでも「神との関係の下で」すべてを理解し説明するという方法論が認められるのである。

3 「下から」と「上から」の相補性

パネンベルクは『キリスト論要綱』において明言しているように、「下からのキリスト論」を自らの方法論として採用している。しかし、これに対しては当初から多くの批判が向けられた。その批判は、パネンベルクは信仰に関わる事柄を歴史学などを用いて人間理性によって基礎づけようとしている、というものである。

「それゆえ、下から始めるキリスト論は古典的な受肉キリスト論（上からのキリスト論）を完全に排除すると考えてはならない。下からのキリスト論は、古典的キリスト論が特に説明を加えることなく、いつもすでに前提にしてしまっている啓示の歴史という基盤をただ再構築するだけである。「下からの」論証が優位に立つのは、方法論の観点においてのみである。下からの論証を行っていけば、受肉思想はイエスの出現と運命に含まれる特別な意義を改変するのではなく、実情に即して展開することになるのである。ナザレのイエスにおいて受肉することを通して人となった永遠の御子が事実上の優位をもつ。したがって、「上から」と「下から」という二つの論証の方向は、それを正しく理解するなら、相補的な関係にあることが分かる。」¹¹

たしかに『キリスト論要綱』においても、イエスに関わる問いは、イエスの地上における言動などよりも父なる神との関係について問うことから始められている。つまりパネンベルクは、人間イエスから始めてイエスが神の子であることを論証していくという手法は採っていないのである。さらに言えば、彼は万物を神との関係において論じるのであり、イエスにおいても最初から神との関係が問題になるのである。シュルツによれば、多くの批判者はこの点を見逃していたと言わなければならない。

4 考察と課題

以上、ごく大雑把にはあるが、シュルツの論述に従う形で、パネンベルクの用いている方法論を明確にした。繰り返すと、それは「あらゆるものを神との関係の下で理解し説明すること」である。そこには「下から」と「上から」の方法論が相補的な関係で含まれており、そのどちらか（特に前者）に偏ったものとしてパネンベルクを批判することはできない。

また、これもよく誤解されることであるが、パネンベルクは神の存在を仮説として、その仮説によって現実をうまく説明できれば仮説は正しかったという論法で、神の存在を弁証しよう

¹¹ ST2, 327.

としたわけではない。彼にとって神の存在は仮説ではなく出発点である。そこから神学を始めいき、神との関係においてあらゆる現象を説明していく。その説明が現実経験に適合しないときには別の説明を考え出す。そのようにして神学的な営みが永遠に続けられていくのである。それは歴史が続く限り永遠に続けられるものであり、「先取り」によって結論が最初から分かっているということでもないのである。

シュルツの論述は実に明快で、彼によってパネンベルクの方法論が初めて誤解のない形で把握できるものになったと思われる。しかし、彼の提唱する「ポスト基礎づけ主義」については不分明な点も残っている。「第三の道」を提唱する場合によくあることかもしれないが、「第一でも第二でもない」という消極的な形でしか定義されない「第三の道」の具体相は最後まで見えないままである。そのため、パネンベルクの方法論がどの程度までポスト基礎づけ主義的であるのかもよく分からないし、その可能性について問うことも難しい。これについては、シュルツのその後の著作、特にパネンベルクの組織神学について書かれたものなどを参照しつつ考察を進めていきたい。また、パネンベルク自身が基礎づけ主義ということについてどのような言及をしているかも明らかにしていく必要があるだろう。

なお、パネンベルクの神学の方法論について考察した論文、著書は数多い。その中でも、ナンシー・マーフィーの考察¹²は注目に値する。そこで、彼女の諸論文においてパネンベルクがどのように言及され批判されているかをも明らかにし、またそれをパネンベルク自身の言葉に照らし合わせながら考察していくことも、本研究会における私自身の課題としたい。

(はまざき・まさたか 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

¹² Nancy Murphy: *Theology in the Age of Scientific Reasoning*, Cornell University Press, 1990. など。マーフィーはこの著書の中で、「パネンベルクの体系は科学の方法に適した理論を欠いているので、より適切な科学哲学に照らし合わせてそれを再構築するためには、修正されなければならない

ない」(p. 20)と述べている。